甲子園中継に現れる高校野球観 The Image of High School Baseball as Portrayed in Broadcasts of the National Tournament

1K07B511-0 林口 隼也

指導教員 主査 リー・トンプソン 先生 副査 寒川 恒夫 先生

【研究背景・目的】

甲子園大会は、夏の風物詩とも呼ばれる。この国民的スポーツイベントには、長い歴史を経て「爽やか」「全力」「諦めない」「努力」等の築き上げられてきた多くのイメージが存在する。そして、テレビを始めとする多くのメディアが視聴者にイメージを刷り込んできた事によって、日本人らしさや若者らしさ、高校球児らしさを形成していったと考えられる。

本論文において解明したいのは、近年の甲子園中継は、築き上げられてきた高校野球観を全て受け継いでいるのか否かという事である。違うのであれば、どの点が受け継がれ、どの点において新しい要素を付加しているかを明らかにしたい。ここでは、早稲田実業高校対駒大苫小牧高校の決勝戦が行われた2006年夏の、第88回全国高等学校野球選手権大会に限定している。

【第1章】 高校野球観成立までの歴史的背景

第1章では、国民が抱く高校野球に対するイメージや理想像等は如何にして形成されてきたのかを歴史的背景に沿って考察する。

高校野球観が形成される上で、大きな影響を与えたのは第一高等学校が行った精神主義・勝利至上主義的な所謂、武士道の精神を重んじる練習である。飛田穂州を始めとする一高出身者が後に、新聞社等の高校野球を国民に伝える仕事に携わる事で、その武士道的精神こそが高校野球らしい、本来の姿であると日本全体に刷り込んでいったと考えられる。

【第2章】 先行研究の検討

第2章では、過去に高校野球に関する研究を行ってきた人々の文献・論文等を引用し、共通する高校野球観を導き考察する。第1章で述べた歴史的背景の下、高校野球に対してどのような研究がなされ、選手・メディア・鉄道会社・高校野球連盟などそれに関わる人々がどの様に高校野球を認識しているのかを述べる。

甲子園は、企業の経営戦略の一環として発展を遂げてきた。つまり、企業にとって都合の良いイメージから逸脱する事は、その大会の構造そのものを破壊してしまう危険性がある。だからこそ、視聴者を一括りにして理想像やらしさを押し付けなければならないのである。しかし、視聴者の受け取り方は多様であるので、それは矛盾しているのではないかと考える。

【第3章】 2006年度甲子園中継の内容分析

第3章では、第88回全国高等学校野球選手権大会の決勝戦及び決勝再試合の内容分析を行う。具体的には、物語を作り出す解説者・アナウンサーの言説を分析し、その事によって推測される、甲子園中継における強調された高校野球観を、ここでは2つの方法で示す。

1つ目は、アナウンサー・解説者の言説の中に登場する物語化を助長するキーワードを抽出し、回数を計測した。これによって、何を中継側が強調したいかが明確になった。分析結果は、要旨の最下部、表1を参照されたい。

2つ目は、高校野球観を形成する上で特に注目すべき事例をそのまま抜き出して解釈を加え記載した。

内容分析を通じて分かったのは、2006年大会においては、駒大苫小牧高校の大会三連覇と早稲田実業学校の初優勝という「勝利」「優勝」に拘った実況及び解説がなされていたという事である。

【終章】 まとめ

終章では、それまで述べてきた事柄を踏まえ、2006年の甲子園大会において何が以前の高校野球観と違い、何が同じなのかを明らかにしたい。そして、甲子園中継が如何にして視聴者に物語を刷り込む事に執着しているのか述べる。

結論としては、甲子園中継は全ての高校野球観を現代も受け継いでいるのではなく、毎年特有の物語を作り出す事で、新しいイメージを付加していると考えられる。視聴者には、それを理解する能力とマスメディアに左右されないメディアリテラシーが求められる。その事が更に甲子園を楽しむ事に繋がるのではないかと。

	決勝戦	再試合	合計
夏三連覇	20	19	39
三連覇	7	13	20
夏の三連覇	0	2	2
初優勝	4	10	14
悲願の初優勝	13	15	28
四連投	1	15	16
三連投	9	6	15
37年ぶり	0	6	6
73年ぶり	5	5	10
…年ぶり	11	14	25
苦しい試合の連続	3	3	6

表1 2006年夏の甲子園大会における
物語化を助長するキーワード登場回数